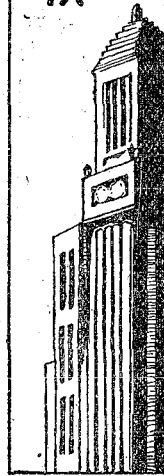


路政春秋



注

本欄は讀者諸氏の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に涉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

道路の改良は興亞の基礎

我帝國が敢然として東亞新秩序の建設に猛進することとなつた。夫れで國際間に及ぼした影響は甚大なるものがある。英佛米の既得權益の擁護的抗日策、ソ聯赤化の野望的援蔣行爲、米國の先入的重壓策など關心すべき事相が現はれたが國內に於ても各方面で革新的動向が認めらるゝに至つた例へば企畫院、興亞院の設置は勿論官界に未曾有の紛争を捲き起した貿易省の新設の如き皆此の關係に出つ、然しながら更に更に緊切な仕事は日滿支を通しての交通の完備である。即ち通信を始め、航空、航海

路政春秋

陸上輸送の整備である。而かも道路に依る交通は海を隔つる關係より我國內と滿支の大陸とは密接の關係なきかの感をもつものなきを催し難いが事實は非常なる關係を有するものである。従つて國內道路網の根本的方策を樹つることの急務なるは年來「道路改良」誌上に掲載する所である。内務省土木當局が時局の要求に即應する爲めに重要道路網の選定改良の方策、自動車専用道路の設置の如き方面に涉り根本的計畫を樹立せんことに着眼し其の經費を要求する所あるは寔に時局に直面し迫るべきの正道を見出したる意圖と謂はざるを得ない。吾等は其の實現を望むことの痛切なるものがある。敢て當局の勇往邁進を熱望する。(T

生)

荒廢の姿もわびし十

三峠

中山道中の最險路と謂はれた岐阜縣下惠那の十三峠、西行坂を西に越へ、横、いはひ坂、平六坂、べに坂、茶屋坂、新道坂、權現坂、樫の木坂、順禮坂、曾根松坂、牛ヶ淵坂、寺坂の夫れは三つの一里塚、二つの立場、峠々の出茶屋には旅人の賑ふにまかせ「西行のわらじもかゝれ松の露」の句碑に俳聖芭蕉を偲ひ、風雅人にあらずとも道のべに流るる清水波まんとて柳かげにしばし立ち止まるのであつた。だが今は昔の狀態も變り土岐川沿ひの國道は改修せられ中

央鐵道線の開通により中山道は廢道同様となり、十三峠も荒廢の姿となつて時勢の變遷を物語つて居る。人の心の忙はしく一概に舊きを捨て、新しきを求むるを以て現代的と心得る輩には、當然のことと見らるべきも舊きも新らしきもなき自然の姿にこそ永却不磨の生命が求めらるるではなからうか。(煙川生)

闇の街路に笛の音

今を去ること五十有餘年前、夫を喪ふて哀愁に籠り居る異郷の一夜、闇の街路を流し行く按摩の笛の哀音に眼も冴へてねむられぬまゝ、窓外の笛の主をば呼び入れ十六、七歳の盲少女の身の上話に心打たれた米國の一婦人の耳に病氣のお母さんの爲に働いておられますお母さんにはどんなことをしても食べさせてあげなければなりません。私は食べなくても何とも御座いませぬ食へないことも幾日もございます。日本民族の特性の聲の響き、「何んといふ尊い心で

せう。黄金の椅子があつたら此少女を坐らせたい」と心からの賞嘆の一言、此は「横濱盲院縁起」である。ドレーバル翁の物語る街路に聞きし孝女の笛の餘音である。

村の収入役は女に限る

世の遷り行くにつれて女人職場の擴大し行くのも時代の一現象である。神奈川縣津久井郡三澤村といふ山村では養蠶を殆んど生業として居る地方であるが、程近い相模原が軍需工場地帯化した爲めに男が職工に轉向するので不足を來たし村政までが脅かされ収入役の詮衡難に陥り八千圓位の村費中から輸入収入役を求むるの餘裕は見出されない。そこで案出されたのが父の収入役として教養ある女性を代理に事務を執らすることとした。選ばれた女人は成徳女子商業學校卒業生である。事務を執らせて見ると流石に商業學校出だけあつて算盤は達者であるし、都會で磨かれて來た丈けに久し

く停滞した會計の事務はドシドシ片づく上、男では喧嘩腰になる滞納租税の整理も物軟かに催促するので千六百餘圓もあつた滞納も忽ち半額に減した。今後は滞納税皆無となるのは疑がない。村の収入役は女に限る」とは村會議員達の賞讃の言葉である。勤勞奉仕の女の職場が擴大されるのも無理ならぬ譚である。

外務の窓から悲愴の

叫び

國內機構の革新を以て事變處理の一方策とする内閣で貿易省設置問題をめぐつて農林、商工、大藏、外務の各省の事務當局者間には不賛成の聲が聞えへたが此等の聲にはトント耳を借さなかつた立案當局者側ではグン／＼と事を進めて遂に内閣をして設置要綱を決定せしめた。忽ち烽火は外務省通商局に擧げられ同局長の辭職となつたが更らに燎原の火の如く炎々として燃へ上り遂に少數を除くの外高等官百十數名は威壓

の聲を耳にしながら連袂辭職することとなつた。之に對しての世評は極力之を非難するものもあるがまた同情するものもある。

其の關係者は之等の世評に對し、「私達の行動を或は右翼的革新派の反政府的意圖に出つるものであるとし或は自由主義的反動派の反軍部的動機に因るものと見るものがあるが私達はたゞ外交一元主義を以て職務權限の適切な調節を庶義する以外に更らに他意がない。又私達がストライキをやつておるとの評があるが國家の爲めに一身上の利害を犠牲として主張するもので此評は當らない。次には「下剋上」で官吏としての服從義務に違反して居るとの非難がある。私達は重大時局下に於て職責上忠實ならんことを痛感するの餘り已むを得ざるの行動に出ておる」との辯明を爲して居る。第三者として、今俄に其の是非を妄斷することは許されぬが殆んど擧省一致の意見には寛容の心構を以て取扱ふことが必要以上の必要事ではなからうか、とにもかくにも霞ヶ

關に響く悲愴極まる外交官達の哀音には心臓の鼓動のはげしきを感じる。(徳歩生)

あるかなきかの珍聞

奇譚(84)

○桃山時代の佛像が路傍から、久留米市原古賀町の觀音堂から由緒深い佛像のわずかが發見され好事家の話題を集めてゐる。乃ち久留米市本町通から櫻町遊廊へ入る横町のさゝやかな觀音堂にかねて國寶級の佛像が安置されてゐるとの古き傳へを郷土史家淺野陽吉、岡來藏、廣重美木氏らが聞き、

たまたま歸省中の東京高等工藝學校教授豊田勝秋氏を煩して同觀音堂を開扉したところ果せるかな正面に本尊の聖觀音(高さ二尺餘)左側に勢至菩薩、右側に十一面觀音の三體を安置し、しかも本尊の胎内からは高さ三寸餘の觀音立像が現はれた。此處の堂守として永年仕へてゐた石井祖傳尼が保存する縁起書によれば、いまを去る五百餘年前三藩郡安武の城主として羽振りを利か

せてゐた安武安房守鑑政の持佛を社圓法師が勸請して萬治三年原古賀大榎の下に觀音堂を建立せり、と認めてある。胎内から現れた觀音立像こそまさしく安武安房守の持佛らしく、顔面は多少破損してゐるが藤原時代の作に疑ひなく、また本尊の聖觀音は桃山時代の作と見られるも修理のあと著しく判明し難い、さらにその佛壇の奥にはこれまた立觀音像(胎内物)と同期の作と思はれる立像、坐像の二體を發見した。淺野氏らはこの由緒深い佛像の出現を大いに喜び近く正式に専門家の鑑定を仰ぐことにした。

山の上に山現はれし

紅葉かな

巴藤